

春の兆し－オオイヌノフグリの小さなブルーの花

藤原 道夫

立春を過ぎると日が延び、夕べの空が明るくなってきたことを実感する。公園や空き地の日当たりのよい所では若草が目立ってくる。晴れ上がった日に外に出て草むらを見ると、思わず探し物をするような格好になってしまう。オオイヌノフグリの小さなコバルトブルーの花が咲いてはいまいかと、きよろきよろ探しまわる。陰ると花が閉じてしまうので日が照っている間がチャンスだ。

オオイヌノフグリはハコベやホトケノザなどとともに雑草とされ、花も人目を引くほどではない。一方で花の可憐さを愛でる愛好家も少なくない。私もその一人。

この草は外来種で、明治になった頃に入り込み、在来種イヌノフグリの生息地を奪ってきた。イヌノフグリは今ではめったに見かけない。大分前に田舎で4, 5ミリほどのピンクがかった4弁の花を見たことがある。花が散ってしばらくすると犬のふぐりに似た小さな実をつける。これが草の名の由来、命名の妙だ。オオイヌノフグリの花は7, 8ミリほど、ブルーの4弁の花に紺色の筋が入っている（下の1弁は小さく色も薄い）。2月初めから3月中頃にかけてあちこちで見かける。

この花に興味を持ったのは随分昔のこと、新聞で佐藤達夫さんのエッセイを読んだ時だった。この方は重責を負う身でありながら、時間の許す限り野原を歩き回って野草を観察し、その時々草花を記録していた。その年に出あった最も印象的な草花を選んで版画をおこし、年賀状をつくっていたという。ある年にオオイヌノフグリを取りあげたとあった。

野草の観察を自分流に真似てみた。オオイヌノフグリは近場で見つかった。高尾山や陣馬高原を歩き、様々なスミレ類や絶滅危惧種のキンランなどに出あった。また旅行に出かけた時に見たオキナグサやレブンソウを描いた年賀状もつくってみた。野草の探索は海外留学によって中断してそのままに。ただ花を探す癖が残った。

今年は立春前に小さなブルーの花を見つけた、ブロック塀の下の陽だまりにちらほらと。もう野原でも咲く時期だ、タイミングを見計らって群生するところに出かけ、春の兆しをいっぱい楽しむとしよう。